

作業所学会分科会 記録者用 事例・活動報告書

記録者名：寺田 志のぶ

発表者：平野 潔（（福）M ネット東遠 相談支援専門員）

（所属） （福）みどりの樹

【支援・活動事例の概要】

目標・目的	本研修は、令和7年10月に施行された就労選択支援事業について、制度の仕組みや給付構造の理解にとどまらず、制度が生まれた背景にある地域課題や権利擁護の視点から、その本質を見つめ直すことを目的として実施した。特に、障がいのある方の「はたらきたい」という思いに、支援者がどのように向き合い、意思決定支援としてどう関わるべきかを振り返り、自己実現につながる支援の在り方を考える機会とすることを目標とした。
計画・手段	相談支援事業所からの事例報告を中心に構成した。制度解説を主軸とするのではなく、実際の支援場面に即した具体的な事例を通じて、参加者が自身の支援を振り返りながら学べる形式とした。また、意見交換の時間を設け、現場での悩みや疑問を共有し、相互に学び合う場となるよう工夫した。
内容・経過	話題提供として、M ネット東遠の平野潔氏より、相談支援の立場から「相手の立場から見つめる、3つの『はたらく』」をテーマに事例報告が行われた。就労選択支援事業を、単なる制度活用として捉えるのではなく、本人の意思決定を尊重し、自己実現につなげる支援としてどう位置づけるかが示された。事例では、働く時間や内容への本人の希望、就労経験を通じた変化、離職を含む選択の過程などが率直に語られた。
結果・課題	参加者からは、「はたらくこと」の意味を本人の視点で捉え直す重要性や、意思決定が一度きりの選択ではなく、揺れ動きながら形成される過程であることへの理解が深まったとの声が多く聞かれた。一方で、制度が就労への誘導や選別につながることへの懸念や、現場での具体的な活用イメージがまだ持てていないという課題も共有された。支援者が無意識に選択肢を狭めていないかを点検する必要性も示された。

【意見交換】

意見交換では、就労選択支援という言葉の持つ難しさや、「はたらきたい気持ち」をどのように受け止めるべきかについて活発な議論が行われた。就労そのものをゴールとするのではなく、本人の生活リズムや価値観、居場所や役割との関係性の中で捉える必要性が確認された。また、意思決定支援の前提として、安心して迷える関係性づくりが重要であるとの意見が多く出された。

【まとめ】

就労選択支援事業を新たな制度として理解することにとどまらず、支援者が日々の実践を振り返り、「はたらきたい」という本人の思いにどのように向き合ってきたのかを見つめ直すための機会とした。はたらくことは、収入を得る手段にとどまらず、自己肯定感や社会とのつながり、役割の獲得など、人生の質に深く関わる営みである。制度や支援の枠組みを優先するのではなく、本人の語りきれない思いや背景に寄り添いながら、その人らしい「はたらく」を共に考えていく姿勢の重要性が改めて共有された。平野氏の事例報告や意見交換を通して、意思決定は一度の選択で完結するものではなく、迷いや揺れを含みながら、周囲との関係性の中で少しずつ形づくられていく過程であることが示された。支援者が良かれと思って示す選択肢が、結果として本人の思いを狭めてしまう可能性があることにも気づかされ、本人が安心して迷い、立ち止まり、考え直すことのできる環境づくりこそが意思決定支援の基盤であると再認識された。